

岩波文庫

794

通俗古今奇觀

附月下清談

淡齋主人譯
青木正兒校註

岩波書店

昭和七年二月五日 第一刷發行
昭和二十三年四月二十日 第十刷發行

通俗古今奇觀

定價參拾貳圓



校註者 青木正兒

編集者 布川角左衛門

發行者 岩波雄二郎

印刷者 原喜平

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店

會員番號A一〇九〇〇四號

凸版印刷・永井製本

岩波文庫

794

通俗古今奇觀

附月下清談

淡齋主人譯
青木正兒校註

解題

「今古奇觀」は支那短篇小説の傑作集であつて、其中には宋から明に至る間の資料が含まれてゐる。此書は元來明末萬曆・崇禎間の人馮夢龍の編した短篇小説集「古今小説」「喻世明言」「警世通言」「醒世恒言」及び同時の人凌濛初の編した「拍案驚奇」の初刻と二刻の六書中から特に面白と思はれるもの四十篇を選んで刊行したものである。馮夢龍は蘇州の人で、其居を墨憨齋と號し、戲曲小説に精通し、小説では右四書の外に「平妖傳」なる長篇をも増補して出してゐる。戲曲では自作は僅かに二種であるが、古今諸家の作十種餘りを刪改して墨憨齋定本なるものを出して居る。其他著書に富み、其「情史類略」「笑府」等は夙に我邦人に愛讀せられたものである。創作家と云はんより寧ろ好事家で、短篇小説に於ても古今の通俗小説を多く家に藏して居て、其等の中から選擇して編刊したのが右の四書で、其中には宋元以來の傑作が多く抱合されてゐる。凌濛初は吳興の人で、即空觀主人の別號を以て知られてゐる。短篇の戲曲數種を作つてゐるが、其校刊した西廂記は現行第一の善本として最も著名である。かの「拍案驚奇」は馮夢龍の書に倣ひ其後を承けて蒐輯したもので、世に兩人の是等の書を「三言二拍」（古今小説を除外す）と並稱し、短篇傑作の淵藪とされてゐる。是等の書は編刊の際、原本の文章に筆を入れ又自作も若干加へてゐるやうであるが、兎も角彼等の事業は宋元以來の短篇小説を取り纏めて讀書界に贈つた點に於

て小説史上大なる功績と認めねばならぬ。而して「今古奇觀」は更に是等に基づき合計二百篇の中から四十篇を選び、手ごろな讀物として世に出したのであるから、宋明短篇小説の概觀此に在りとするものが出來やう。固り其選擇が必ずしも善美を盡してゐるとは稱揚出來ないが。

「今古奇觀」の編者は姑蘇（即ち蘇州）の抱甕老人と署名してあるが、本名は未だ詳て無い。但だ編者の友人笑花主人の作れる本書の序文中に「迄於皇明文治事新」云々とある『皇明』の二字が行を改め本文よりも行頭を上げて記してある。是は書寫の通則として當代の王朝に對して尊敬の意を表はす爲であつて、筆者が明朝の人たることを知り得られる。又明朝を呼ぶに『皇』字を冠することも當代の人で無ければせぬことである。是に據れば本書の編者が明の未だ亡びざる以前に於て爲されたことが知られる。而して三言の編者馮夢龍は清初順治二年に死し、二拍の編者凌濛初は順治十二年に死んだと傳記にあるからして、本書の編せられた時原編者兩人は猶ほ在世してゐたことと思はれる。さて此書一たび出づるや簡便である爲に讀者を呼んだものらしく、後世に到るまで盛行して時に應じて種々の翻刻本が出版され、今日に及ぶまで讀者を絶たない。然るに三言二拍は清初は猶ほ翻刻本も出て廣く行はれてゐたらしいが、時を経ると共に漸く世から忘れられ、「今古奇觀」に株を奪はれた形になつて來て、現今では珍本となつてしまつた。「醒世恒言」「拍案驚奇」は稍や流布してゐるが、其他の書に至つては近年鹽谷溫博士及び其門下長澤規矩也學士等の搜索によつて、内閣文庫、大連圖書館、徳川侯爵家蓬左文庫等に散在して珍藏されてゐることが追々世に紹介されて來た有様である。

『三言二拍』及び「今古奇觀」が何時頃我邦に輸入し始められたかは未だ詳にするを得ないが、先づ此種の短篇小説の紹介に先鞭を着けた者は播磨の儒者岡白駒であるかと思ふ。彼は「小説精言」四卷（寛保三年刊）「小説奇言」五卷（刊年未詳）を出版し、兩書通計九種の短篇小説の原文に訓點傍訓を施してゐる。其等は大體『三言』から取つたものゝやうである。内四種は「今古奇觀」にも出てゐるが、是等も直接『三言』から來てゐるに相違無い。「奇言」「精言」の書名は明かに『三言』に模倣した形跡がある。白駒の後を承けて同類の書に奚疑主人の「小説粹言」五卷（寶曆八年刊）が有る。是も主として『三言』に依つたらしい。奚疑主人は京都の風月堂莊左衛門と云ふ書肆で、岡白駒の門人であると云ふ。白駒の「小説精言」は此店の出版である。「小説奇言」も多分同様であらう。余の藏本奥附を失つてゐて知れない。

さて岡白駒に次では大阪の儒者都賀庭鐘の作で近世讀本の祖と稱せらるゝ「英草紙」（寛延二年刊）は是等の書に材を取つてゐる。余は嘗て其中三篇が「今古奇觀」の翻案であることを指摘したことがある。即ち

- 馬場求馬妻を沈めて樋口が聳と成話。（金玉奴棒打薄情郎——今古奇觀——又は古今小説）
 - 豊原兼秋音を聴て國の盛衰を知る話。（兪伯牙琴瑟謝知音——今古奇觀——警世通言）
 - 黒川源太主山に入つて道を得たる話。（莊子休鼓盆成大道——今古奇觀——警世通言）
- 更に一種が「古今小説」に出てゐることを吾友長澤規矩也君が見出した。

○紀任重陰司に到て滯獄を斷る話。（閻三陰司司馬貌斷獄——古今小説——噫世名言）

右の如く「噲世名言」に出てゝ而も「今古奇觀」に選ばれてゐない話の存するに據て之を觀れば、庭鐘の本づく所も亦「今古奇觀」で無く、寧ろ直接「古今小説」や『三言』に據つたらしく思はれる。従つて彼が之に繼いで續編として出した「繁々夜話」(明和三年刊)、「秀句冊」(天明年間刊)にも『三言』の影はさしてゐるであらうと思はれるが、未だ當つて見ない。尋で江戸の國學者石川雅望は「通俗醒世恒言」五卷(寛政二年序)を出して「醒世恒言」の中四種を翻譯してゐる。之に江戸板と大阪板と有つて、江戸板は「通俗小説奇事」と題してある。「此に至つて『三言』の一つが純然たる國譯として現れて來たわけである。猶ほ同書卷尾の廣告には『後編通俗醒世恒言三十六種近刻』と有つて非常な抱負を示してゐるが、副刻は實現しなかつたらしく、未だ見聞する所が無い。看來れば此頃の人の據る所は「今古奇觀」で無くして、寧ろ其の原本たる『三言』で有つたのである。併し天明四年の序のある秋水園主人の「小説字彙」(寛政三年刊)の引用書目中には『三言』の外に「今古奇觀」が擧げられてゐるから、其頃『三言』と並んで此書が行はれてゐたことは明かである。

右の頃からして文化・文政頃にかけて支那小説の大流行を來し、此潮流に乗つて遂に文化十一年に至り、「今古奇觀」の國譯も「通俗古今奇觀」五卷となつて世に出たのである。譯者の淡齋主人は誰であるか未だ詳で無い。尙ほ同書卷尾の廣告に『同二帙五冊近刻』の由が記してあるが、副刻に就ては未だ見聞する所が無い。

さて本書に譯出せる所は僅に三種であるがいづれも其事極めて奇で有つて、就中二種は最も人

口に膾炙し古今に艶稱せられてゐる傑作である。先づ「莊子休鼓、盆成、大道」は明末既に之を戯曲に改作して世に行はれてゐる。即ち「四大痴傳奇」と稱する四種合刊の劇本中「色癡」(作者未詳)がそれである。清の乾隆頃に至つて之に稍筆を入れ「蝴蝶夢」と題して盛行し、近時なほ此劇は行はれてゐる。之には我國でも寛政頃のものかと思はれる國譯本も出來てゐる。余は嘗て之を校訂して近代社發行の「古典劇大系」支那部に收めて置いた。小説の方は上に述べた如く「英草紙」中に翻案されてゐる。次に「賣油郎獨占花魁」も亦明末既に李玉の作「占花魁」と云ふ長篇の戯曲となつて現はれ、清代まで盛行してゐる。我邦に於て芝屋芝叟の「賣油郎」五卷(文化十三年刊)の讀本は全く此小説の翻案で有る。而して其刊行の年が「通俗古今奇觀」より二年後なるを見れば、恐らく翻案者は此譯本から材を取つたものらしく、原本が讀めたわけで有るまい。其後「返舍」一九の作に「通俗賣油郎」(文政七年刊。未見)と云ふ草雙紙が有るさうであるが、是も亦恐らく此譯本のお蔭を蒙つてゐるものであらう。講談にある紺屋高尾の類の話は此小説と甚だ似てゐる、是も恐らく「賣油郎」の燒きなほしてあらう。かくの如く此二篇は我國文學に若干の影響を與へてゐる點は注目す可きであり、特に「賣油郎」の話に至つては此譯本の力多きに居ることは見のがす可からざる功績である。

今附録として添へた森羅子の「月下清談」五卷(寛政十年刊)は「今古奇觀」に收められてゐる「錢秀才錯占三鳳凰傳」(もと醒世恒言に出づ)を翻案したものである。翻案者森羅子は本名を桂川甫榮と曰つて、江戸の蘭學者桂川甫周の弟である。亦蘭學に通じ、兄を佐けて蘭書の翻譯

に従事し、傍ら狂歌小説を弄ん、其方面の著述も少くない。ところで「錢秀才」の小説は彼に先立つて既に岡白駒の「小説奇言」に原文のまゝ選刊し、訓點傍訓を附して支那俗語を解せぬ者にも讀めるやうにしてある。森羅子は支那俗語が出來たらしくも無いから、其翻案は多分此訓讀本に本づいたものらしく、直接「今古奇觀」もしくは「醒世恒言」の原本を讀みこなしたわけであるまい。此話は極て奇事であつて、「醒世恒言」の著者馮夢龍は其著「情史類略」卷五にも「吳江錢生」一條に此話を出してゐる。之に據れば此事は明の萬曆年間江蘇省の太湖の沿岸に在る吳江縣に起つた事實であると云ふ。馮夢龍と同時の人で吳江の沈自晉は此話を取つて戲曲「望湖亭」を作つてゐる。兎に角當時其地方に盛傳した奇事であらう。左に原作と翻案との主要人物を對照すれば、

(原作)

(翻案)

吳江の秀才、錢青 伊勢采女村の書生、石上織部

其表兄母方のいこ、顏俊 其從兄、吾彥求馬

吳江の果物商、尤辰 吾彥家出入の穀物商、正田藤六

洞庭太湖中の島の富家、高贊 尾州宮の長者、大江匡行

其愛嬢、秋芳 其愛嬢、昭子

筋は大體原作のまゝを我邦俗に合ふやうに移してある。翻案者が稍や窮したらしい點は、此物語の關鍵たる「迎親」即ち新郎が親ら新婦の家に迎に行く婚禮の風俗である。是は我風俗に無い

所であるが、之を國俗に合ふやうに改作しては此物語は成立し難い。因て翻案者は之を以て女家の祖先大江匡房の江家次第に據つて行ふのだと附會してゐる。其他はさしたる無理も無く、事件の起つた地點たる太湖を以て伊勢灣に當てゐるなども手際が宜しい。

(附記) 本書の名稱に就き、譯本は「古今奇觀」としてあるが、余の知れる限り原本は皆「今古奇觀」の名を以て行はれ、未だ「古今」と題するもの有るを聞かぬ。但だ原本の笑花主人の原序中に「名爲古今奇觀」とある。蓋し譯者は之に據て特に「古今」と題したものであらう。

昭和六年八月

青木正兒

校註凡例

一、「通俗古今奇觀」は片假名本であるが、今平假名に書易へた。

一、「通俗古今奇觀」の句讀は新に施した。「月下清談」は原文に句讀が有るので之に従ひ、但だ新に句點と讀點との別を設けて讀み易くした。兩書共に文の段落の處で行を改めたこと、及び「」符を用ひて會話の文を區別したことは新に施したものである。

一、「通俗古今奇觀」の頭註には字句の解釋の外に、往々譯文の誤を訂正して置いた。それは一つには誤譯の爲に譯文の意味が通じかねたり、原意と相違したりして讀者に不便なるを思ひ、一つには譯文を參考して原文を讀んで見やうとする初學者に幾分役立つかと思つたからである。

併し譯文には原文を略したり、大意を取つて譯してゐる處も少くないが、大義に差支へぬ限り不問に付した。

一、僅小の字句の修正によつて譯文の誤を正され、若くは原文の意がより善く傳へられると思つた處は（ ）符を用ひて校註者の修正文を擬して置いた。是に二種の方法を用ひた。(一)は本文の間に（ ）をして譯文の不足を補つたこと。(二)は本文の右側に（ ）をし譯文の誤を修正したこと。

(例)近世人情惡薄にして、父子兄弟は至て又平常なり。兒孫はこれいたはるといへども、夫婦の情にくらべ(得)ず。他（か）に溺るゝは閨中の愛、聽ものはこれ枕上の言、……………

右の如きは『父子兄弟はかへつて平常なり』『くらべ得ず』『彼が溺るゝは』と修正して讀まれたい。

一、讀者の便を思ひ、文中漢字の振り假名を多少新に増加し、特に片假名を用ひて區別した。

一、「通俗古今奇觀」の中、文字鄙猥に亘るもの五箇所だけ、……符を用ひて最小限度の省略を行つた。

一、「月下清談」の中、文字の誤れるもの、あて字等にて一般の讀者に解りにくいと思はれるもの若干を其字の下に(へ)をして修正もしくは本字を示して置いた。但し板下書きが書寫の誤なること明かなるもの二三、無斷で訂正した處が有る。

一、「通俗古今奇觀」漢文序の句讀訓點、「月下清談」序の句讀は新に施した。

通俗古今奇觀

青溪
木齋
正主
兒校註著

古今奇觀序

鐵網中無_レ不_二夜光。抱甕老人之撰也。剪_二出梅花。冰姿宛然。淡齋先生之解也。蓋天下奇書。固須_二慧解人。而閭閻罕_二能讀_レ之。先生一片婆心。試解_二數回。欲_レ醒_二世人。其爲_レ解滄_レ得_レ仙者。夫仙人能換_二其骨。不_レ改_二其面。卽此書悲歡之情。離合之致。如_レ出_二於己。舊來面目自在。大異_二於世之通俗者。可_レ謂_二名解_二矣。余未_レ悉先生已獲_二其心。解_二小說_二者。可_二以爲_レ法焉。回々四十卷。逐_レ回上梓。藝林既有_二此大奇觀。天下睡魔。必當_レ逐_二之。呷_レ吧海。豈不_二愉快_二乎。

棣園主人撰